

哲学のふるさと—ギリシャの哲学者たち

2011. 5. 26

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

≪前回の第2講義のふりかえり≫

- ①古代、人類は、自然や世界についてわからないことだらけ。脅威や畏敬の対象だった。
- ②その後、靈魂（精霊）という抽象物を考え、それがさまざまなものを動かしていると考えた。
- ③いったん生み出された観念は“ひとりあゆみ”を始める。神々をつくりだす。
- ④やがて、世界や人類のはじまり、死や火の起源を説明する、神々の物語、「神話」が世界各地につくられるようになる。
- ⑤しかし、神話の世界の説明では、満足できなくなった。それがギリシャの哲学者たち。

一。万物の元のものは何か？—唯物論のはじまり

1. 最初の哲学者たち

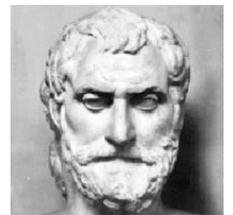
◇ギリシャの植民地—都市国家ミレトス

- *エーゲ海に位置したイオニア諸都市のなかでも、経済的にもっとも繁栄し、政治的にも文化的にも発展していた海洋商業都市。
- *最初の哲学者たちは、このミレトスの市民で、商人として、同時に技術者でもあり政治家でもあるものとして活動した人びとだった。
- *タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスの名が知られている。



◇タレス（紀元前およそ624～546年）—万物の元は「水」

- *政治活動にたずさわったあと、自然科学の研究に。幾何学も学んでいた。
- *彼は、天文学の研究を行った最初の人だとも言われ、日食を予言したり、1年を365日に分けた人とも言われている。著書は残さなかったが、のちの時代の人びとによって彼の業績が伝えられた。
- *影の長さを測ってピラミッドの高さを知る方法をエジプトから学んで伝え、また、二等辺三角形の二つの底角が等しいことを最初に証明した、といわれている。
- *そして、万物の起源は「水である」と主張した人。



「かれらのこれらの自然科学的知識とかれらの唯物論的世界観とは深く結びついていました。神話的説明をすてて、自然を唯物論的にみる眼をもっていたからこそ、かれらは自然科学者としても当時の最高水準をゆくことができたのである」
(西本一夫『唯物論の歴史』新日本新書、1970年)

*なぜ「水」か？ 海がすぐ見える都市。水は多量で、いたるところにある。水は蒸気や氷などに変化する。地下にしみこみ、植物に吸い上げられる。循環する。

*デルポイ（ギリシャの都市名）の神託所に掲げられていたといわれる有名な格言「汝自らを知れ」も、タレスによるものという説もある。

◇アナクシマンドロス（紀元前およそ610～547年）—万物の元は「無限なもの」

*タレスの弟子であり友人。

*水はたしかに多量にあるが、有限である、万物の元のものという以上は、「無限なもの」でなければならない、と考えた。水だとか土だとかというように決めることはできないが、なにかしら無限の空間をしめている物質を考えていた。

*彼は生物進化の考えをもっており、最初の動物は水中に住み、のちに陸上にあがった、人間は魚から生まれたといった、といわれている。

*また、日時計、ある種の天文学の器械、種々の地図をつくった、といわれている。

◇アナクシメネス（紀元前およそ585～525年）—万物の元のもものは「空気」

*アナクシマンドロスの弟子。

*はじめて惑星と恒星を区別した人、といわれている。

*彼は、無限なものであり、万物のもとのものであるものとは、「空気」だと考えた。空気は水と同様かそれ以上に、流動性・可変性にとんでいると考えられた。

*空気が、「希薄化」「濃厚化」によって、さまざまなものに変化すると考えた。

「タレスが、万物のもとのものは水であるとしたとき、すでにそこには、海・山・川・雲・風・動植物などが多様な姿で存在しており、変転きわまりない現象の世界を、このような多様なものとしてそのまま認めるだけでなく、その多様なものの根本になんらかの原理的なものがあると考え、この原理的なものから多様なものを統一的にとらえようとする意欲が働いていました。しかし、タレスのように、多様なものの一つである『水』をいきなり万物のもとのものであると主張しただけでは、原理としての『水』がどうしてまた多様な他のものでもありうるのかということが、まだなんら説明されていませんでした。ところがアナクシメネスは、『濃厚化』と『希薄化』という過程をとおして、一つのもとのもの（すなわち『空気』）が他のものになると説明することによって、原理としての『空気』が同時に多様な他のものでもありうるということへの理解の道を開いたのです。ここにはじめて、多様なものを統一的に理解する一つの仕方が具体的に示されたのであり、アナクシメネスのなした1歩前進がもっていた大きな意義はまさにここにある」（西本一夫『唯物論の歴史』新日本新書）



《補論一「唯物論」って???»

*決めつけや先入観や偏見なしに、ありのままに対象をとらえようとする態度。

*これは、言葉で言うのは簡単だが、ものすごく難しいこと。



「すなわち、現実の世界—自然および歴史—を、どんな先入見的な観念論的気まぐれもなしにそれら自然および歴史に近づく者のだれにでもあらわれるままの姿で、とらえようという決心がなされたのであり、なんら空想的な関連においてではなく、それ自体の関連においてとらえられる事実と一致しないところの、どのような観念論的気まぐれをも、容赦することなく犠牲にしようという決心がなされたのである。そして唯物論は、一般的にいて、これ以上のことをなにも意味しない」
(エンゲルス『フォイエルバッハ論』)

《この3人の「ミレトス学派」たちから学ぶべきこと》

常識とたたかう態度（ときに命がけ…）

感覚や理性で吟味できる

「かれらは、万物のもとのものは何かと問い、これにたいして、タレスは『水である』、アナクシマンドロスは『無限なものである』、アナクシメネスは『空気である』と答えました。

これだけみると、まことに幼稚な話のように思えます。しかし当時は、嵐だとか雷だとかいうような自然現象をすべて神のなせるわざだと説明する神話的な考えがおこなわれていた時代なのです。人びとが一般に、そういう考えになれ親しんでいた時代に、万物（あらゆる自然の事物や現象）のいちばんもとのものを、水だとか空気だとかいう物質的なものだと説明することは、**宗教的・神話的世界観に挑戦して、唯物論的世界観を高らかに宣言すること**を意味していました。

この2種類の世界観のちがいを少し考えてみましょう。ギリシアには有名なギリシア神話があり、神がみがどうしたこうしたという、おもしろい話が物語られています。しかしそこに語られている話では、世界がどのようにして創られたか、なぜ四季の移り変わりがあったり、冬には草木が枯れるのかというようなことの説明は、神がみのなせるわざだということになっており、われわれが**本当かどうかをためしてみようとしても、ためしようのないことと**されています。大昔に神がみがどうしたこうしたというようなことは、われわれの感覚や理性で吟味できないことだからです。これに反してタレスが、万物のもとのものは水だといったとき、この水とは、神としての水（水の神）のことではなく、われわれが日常的に見たり使っていたりしている経験的な水のことでした。（略）われわれが**自分の感覚や理性で吟味できること**であり、そしてこの点が大切なことなのです」
(西本一夫『唯物論の歴史』新日本新書)

*私たちがさまざまな困難や苦しみを「運命だから」「そういう星のもとに生まれた」「世の中そういうもんさ」と従順的に受け入れてしまうとき、「考える」「問う」ことは必要なくなる。



*東日本大震災を「天罰」と言った東京都知事。まさに「検証しようがない」ことで片づけようとする態度の典型といえる。

前の人の考えを「吟味する」「問う」ことよっての発展—学問的精神

「この3人は、宗教的世界観に反対して唯物論的世界観をとらえた、という点で共通しています。しかし、あとの2人がタレスのいったことに無批判にしたがったのではなく、すでにタレス自身が自分の経験や理性にもとづいてその主張をしたのですが、それをさらにあとの2人がつぎつぎに、自分自身の経験や理性にもとづいて吟味し、前の人のいったことでまちがっていると思われることを否定し、新しい、より正しいと思われる主張をすることによって、前の人の考えを発展させていったのです。そして、この態度こそがきわめて大切なものであり、学問的精神とよばれるものです。宗教では、教えられたことをそのまま信じるのがよいことであり、疑うのは罪の深いことだとされていますが、これとは正反対の態度がミレトス学派にみられるのであり、そしてこれらの人びとが『賢者』として尊敬されたということは、紀元前6世紀のギリシア人の植民地において本当の意味での学問が誕生したこと、そしてそれは偶然ではなく、ここに学問的精神をそだてはぐくむ社会的条件があったればこそだった、ということを示しています」
(西本一夫、前掲書)

民主主義と哲学は、相性がいい

*古代ギリシャの場合には、奴隷制にもとづき、女性を除外していたとはいえ、民主主義があった。そこでは、市民は、選ばれれば、都市国家の指導者になることができた。政治への参加、国の統治、自由な討論、・・・これらのことは、ギリシャの人びとにとって、必要な力だった。

*一方、中国やインドなのでも、すぐれた思想家が生まれることはあったが、社会体制が民主主義的でなく、支配者と被支配者にはっきりと分かれており、なにものにも拘束されない討論は生まれにくかった。したがって、「先生のいうことをよく理解し守る」という学問のあり方におちいってしまうこととなった。

*これは、日本が明治維新以降、富国強兵政策、対外侵略の膨張政策をとったとき、民主政治が否定され、「日本は神の国。必ず戦争には勝つ」ということを多く的人是疑いもなく信じ込まされたり、「古事記」「日本書紀」などの天皇家の支配を合理化する『神話』の世界を、教育の場で「史実」と「教え込まされた」という歴史的経験からみても、大事な視点。

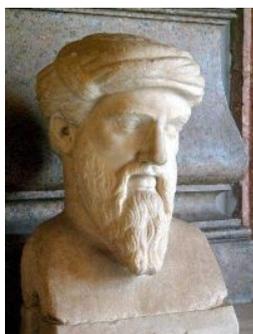
≪補論—「書く」「文字として残す」ことの大事さ≫

二。ギリシャ哲学の豊かさ、そこから学ぶこと

1. 数が元のもの？

◇ピュタゴラス（紀元前 570～500）

*東方のサモス島で生まれ、南イタリアのクロトンで活躍した。



*かれはみずから一種の新興宗教の開祖となり、クロトンにはその教団があった。

*おもしろいのは、音楽や数学の研究にたずさわることが、肉体のけがれを清め、死後に靈魂がその故郷である天界に帰ってゆく、と考えたこと。この考えが、他の宗教団体とはちがい、学問研究者の団体（学団）という性格をピュタゴラスの教団にもたせた。その結果、多くの学者を輩出していく。音楽理論や数学ばかりでなく、天文学などでもこの学派はすぐれた業績を残した。

*かれは、「万物は数である」といった、といわれている。

「ピュタゴラス学派は、宇宙は数的な調和によって秩序づけられていると考えましたが、万物は数から成るとして、数を素数のようにも考えていたようです。点は1で、広がりをもち、線は2、面は3、立体は4でした。10は聖なる数でありました。それは、 $10 = 1 + 2 + 3 + 4$ 、すなわち、点、線、面、立体のすべてを含む、完全な数であり、また、長さが1対2、2対3、3対4の比をなす弦は、それぞれ8度（1オクターブ）、5度、4度の音程を生じるではありませんか。そして、10個の点を正三角形に並べたものが、テトラクテュスと呼ばれ、ピュタゴラス教団のシンボルとなりました」

（高野義郎『古代ギリシャの旅—創造の源をたずねて』岩波新書、2002年）

「宗教を否定しないばかりか、独特の宗教を宣伝普及しようとしております。だからそれは、不徹底な唯物論、観念論に大きく妥協した唯物論だといわざるをえません。この学派の思想には、10という数を神聖な数だと考えて、太陽、地球、月、および惑星を合計した数をむりに10にしようとするというような、数の神秘主義さえふくまれています。だがそれにもかかわらず、この時代に、世界（万物）をして世界たらしめている形態、秩序に目をむけ、その数的関係を探究したことは、なんといたってもこの学派の積極的な功績」

（西本一夫『唯物論の歴史』新日本新書）

2. 古代唯物論の発展。それへの意識的攻撃。

◇ヘラクレイトス（紀元前 536～470）－万物の絶えざる変化

- *ミレトスの少し北に位置するエフェソスの都市で生まれ活動。
- *かれは、ミレトスの3人の哲学者たちと同じように、万物の
もとのものは何か、と問い、それは「火である」と考えた。
- *いっさいの万物は、もとのものである火から出て、また火へと
帰ってゆき、不断の循環運動をしている、と見た。
- *そして、静止のなかに運動をみ、多様のなかに統一をみるのが、ヘラクレイトス
の考え方の特徴。かれは対立物を同一とみる見方を、「神は、冬にして夏、戦争に
して平和」とか、「神においては、善も悪も同一である」というような言葉でいい
あらわした。彼がいつている「神」とは万物のもとのものである「火」のこと。
- *「いっさい万物は流れて、一つとして止まるものはなく、何物もあるというので
はなく、すべては成るのみである」「人は、2度と同じ流れに浴することはできな
い、なぜなら同じ流れでないから」→有名な「万物流転」の思想
- *ヘラクレイトスは、弁証法的な考え方の萌芽を豊かに示した哲学者



◇エレア学派

- ***パルメニデス**（紀元前 500…475 頃～没年不明）。南イタリアの西海岸にあった
エレアというギリシャ人の植民都市で活躍し、エレア学派と呼ばれる一学派の開
祖となった人。
- *ミレトスの哲学者の考えやヘラクレイトスの考えに鋭い批判をなげつけた。
- *「あるものはあり、ないものはない」。事物の変化を認めない。
- *それは、「常識の立場を理論的に徹底させたもの」（高田求『世界観の歴史』）

◇デモクリトス（紀元前 460～370 年）－原子（アトム）とその運動

- *アブデラ生まれ。民主政治の熱烈な支持者。博学の持ち主。
- *質的に 1 種類の根本物質を考えるとさらにすすんで、その
もとのものの物質が、もはやそれ以上は分割することのできない、
微細な最小単位から成り立っているとし、これをアトモンと呼んだ。
このことが、いま使われている「原子（アトム）」の語源であり、
「不可分割的なもの」という意味をもっている。
- *さらに、この原子は不断に自己運動しており、その原子の運動に
よって、万物の変化を説明できる、とした。「天才的直感」。



3. アテナイ期の哲学…ソクラテス、プラトン、アリストテレスは、次回にまわします。

《F・エンゲルスは、以下のように指摘している》

「古代ギリシア人たちの天才的な自然哲学的直感」（『自然の弁証法』序論）

「ギリシア哲学の多様な諸形態のなかに後代のものが見かた考えかたがほとんど
すべて萌芽のうちに、発生する姿で、見いだされる」

（『反デューリング論』の旧序文・弁証法について）

次回（6月2日）は、「封建制社会と宗教的世界観について」です。